

M-GTA 研究会 News Letter No.114

ニューズレターは、発表者の学びやSVのコメントを加えた研究の概要等を掲載したものです。
M-GTAに関する学習の素材となるものです。ご活用ください。

<目次>

◇第16回修士論文発表会 2023年7月29日(土)13:00~17:00 大正大学 ハイブリッド開催	
【中間発表】	1
米井 裕子／地域で生活する脊髄損傷者とピアとの関わり — 脊髄損傷者が地域で生活していくプロセス —	
1. 発表の過程を通しての感想や学び	1
2. スーパーバイザーのコメント	2
3. 研究概要	4
【成果発表】	7
佐々木 理恵／精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成するプロセス	
1. 発表の過程を通しての感想や学び	7
2. スーパーバイザーのコメント	7
3. 研究概要	8
【参加者の感想】	15
◇近況報告	16
◇次回のお知らせ	16
◇編集後記	17

【中間発表】

米井 裕子(放送大学大学院 文化科学研究科 生活健康科学プログラム 修士課程2年)

Hiroko YONEI: Master's Program 2nd Year, Human Life and Health Sciences, Graduate School of Arts and Sciences, The School of Graduate Studies, The Open University of Japan.

地域で生活する脊髄損傷者とピアとの関わり — 脊髄損傷者が地域で生活していくプロセス —
Relationships with peers in people with spinal cord injury living in the community: Process of living in the community by people with spinal cord injury

1. 発表の過程を通しての感想や学び

1) 発表を通しての感想

この度は、貴重な発表の機会を頂きありがとうございました。SVの丹野生先生には、お忙しい中、発表用資料内容、分析テーマの絞り込み、分析の具体的な進め方等について、大変丁寧にご指導頂きました。

今回の発表を通じて、自分の研究が意義のあるものと感じてくださる方がいることを実感でき、大変嬉しく思っております。また、発表会に参加された皆様からは、今後研究を進めていく上で大変有用なご助言を頂きました。発表には勇気がいりましたが、非常に有意義な時間であり、改めてご指導くださった先生方、ご参加くださった皆様に感謝申し上げます。

2) フロアからの具体的なコメントと学び

(1) 分析テーマ

分析テーマは発表者が悩んでいた今回の発表の一番の検討事項であった。助言の内容は主に以下の3点があった。1つ目は、ピアサポートという限定がない場合、あまりにも大きなモデルとなってしまう、非常に複雑で個々に異なるそれら全部を包含するプロセスを描くことは難しいため、どこに注目してどこのプロセスをやるのかを再考した方がよいということであった。2つ目は、ピアサポートを扱う場合でも、ピアサポートの役割、その人にとっての意味付け等、様々な切り口があり、研究者が一番拘っているところについてどう分析テーマを絞っていくかが大事になるということであった。3つ目は、発表者が考えたプロセスの始点である「受傷したことに対する意味付け」は簡単にできるものではないこと、プロセスの終点は分析を進めていく中で見えてくる場合もあるが、どこの範囲にするのかによって分析の内容は変わるため、分析の早い時期にどのプロセスを明らかにするのかを決定する必要があるということであった。こうしたフロアとのやり取りを通して、「脊髄損傷者におけるピアとの関わり」に関する明らかにしたかったことが少しずつ具体的になっていったと感じている。これらを基に分析テーマを決定し分析を進めたい。

(2) 結果図

何かが成り立つためにどういう構造があるのかという構造的な図になっていくものであり、概念生成が進み、ピアの役割としていくつかのカテゴリーが出てくると構造的な図ができると考えられること、さらに、対象を理解して支援の手がかりになっていくものであるため、「何を示したら誰が使ってどう見たら使いやすいか」を考えることが必要であり、どの視点で見ていくかを大事にして分析してほしいというご助言をいただいた。今後は使ってもらう具体的なイメージを持って結果図作成に取り組んでいきたい。

(3) 概念名の生成

発表者が提示した「ピア刺激による奮起」が「指標としてのピア」のようにピアを先行モデルと位置付けるような違う見方があることについてもご助言いただいた。様々な視点からの分析を重ね、プロセスに合った概念生成を目指したい。

(4) 現象特性

現象特性は構造的に動きを見る時のガイドとして重要であるが、発表者の理解は不十分であった。「スポーツ選手がスキルアップしていくことに似ていると感じた」というヒントを頂いたことから、ピアと関わるからこそ変わっていく動きを表現できるよう考えていきたい。

2. スーパーバイザーのコメント

丹野 ひろみ (桜美林大学)

今回、私は、米井裕子さんの中間発表のスーパービジョンを担当しました。1か月前から、メールでのやり取りに加え、2回のZoomミーティングを行い、スーパービジョンをしました。分析テーマの絞り込みの作業から始め、新たに定めた分析テーマにそってデータの再分析を行い、カテゴリー生成に取り組みました。まだ、1人目のデータの分析中でしたので、ストーリーラインを十分に書くことは難しかったのですが、

結果図は現時点のものを発表しました。

まず、「分析テーマの絞り込みの作業」において、2つのポイントがありました。1つは「地域での生活をどうしていくのか」、「どう言葉で表現するのか」です。米井さんは分析テーマに確立・維持・構築といったような言葉を使い、試行錯誤していました。今回のスーパービジョンでは、類語辞典なども使い、言葉の意味の確認、相違について注意を払いながら、比較検討表を作成し、詳細に検討しました。その結果、米井さんが選んだ表現は「地域で生活していく」でした。また、プロセスについては「受傷した後、どう地域生活に戻っていくのか、どう地域生活を送っていくのか」という「変化」に関心があるということがはっきりしました。もう1つのポイントは、分析テーマに「ピアとの関わりを通して」をいれるかどうかです。米井さんの研究関心は「ピアサポート」にあります。そのまま、分析テーマに反映させて、分析テーマを設定することができます。これまでの分析テーマはそのよう設定されていました。しかし、インタビューガイドは「地域での生活を確立していく過程」「ピアサポートとの関わりや影響」「ピアサポートについての考え」から構成されており、ピアだけではなく他の社会的相互作用を含めたデータが得られていました。そのデータ全体を活かしたいという思いもあり、「ピアとの関わりを通して」という限定を外して、分析テーマを設定したという経緯があります。その結果、分析テーマを「絞り込み」したというより「緩める、広げる」ことになりましたので、ここが発表での検討ポイントとなりました。

今回の発表で、フロアからの意見を聞き、米井さんは分析テーマをどう設定するか考え直すことになったと思います。しかし、分析テーマの絞り込みの作業は、分析のツール(道具)となる「分析テーマ」を“研ぎあげていく”作業ですし、この作業を通じ、【研究する人間】がこの道具を十分に使えるようになっていくことが重要だと考えます。ですから、分析テーマの絞り込みとその後の分析作業は、米井さんという【研究する人間】の分析能力をあげてくれたと考えています。

分析ワークシートによる概念生成については、その手順を確認し、理論的メモ欄の活用の仕方についてお伝えしました。手順が合っとうとも、「グラウンディッドセオリー的な思考」、「多重同時並行的な継続比較分析」、「生成的思考」、「解釈」が起動していなければ、形だけになってしまうと思います。その感覚をつかんでもらえるように、思考プロセスをどう伝えるか、スーパーバイザーとしては工夫のしどころです。米井さんは、分析ワークシートの理論的メモ欄に、検討すべきことがらをあらかじめ書き入れて、自分なりに分析作業が進められるよう工夫をしていっしやいました。しかし、残念ながら、そこでの検討は十分ではありませんでした。それで、私の思考プロセスが見えるよう詳細にコメントした分析ワークシートをお送りして、参考にしてもらうことにしました。その後に行った、1回目のZoomスーパービジョンでは、米井さんは「それに影響されすぎるとよくないので、別の概念を生成してみました」と、新たな分析ワークシートを見せてくださいました。今度の分析ワークシートの理論的メモ欄は丁寧に検討作業をした様子が見て取れるものになっていました。このとき、類似例を検討する際には、「定義とマッチするかどうか」を判断するだけでなく、類似例における違いに注目し、いろいろ考えてみることを強調してお伝えしました。これによって、新たな着想が生まれ、検討が進むことがあるからです。また、「多重同時並行的な継続比較分析」を意識するために、定本の「分析プロセスの全体像(p96p160p243p249)」という図を参考にしたり、木下先生の「グラウンディッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い」の「第5章『分かる』という経験」を読むことをお勧めしました。

2回目のZoomスーパービジョンでは、カテゴリー生成について検討しました。ある程度概念生成が進んでいたことから、カテゴリーについて考えていかないと、分類的思考になってしまうのではないかと危惧していました。結果図の卵を見ながら、カテゴリー名が「尖った意味」を保ったものになっているか、引いて

ある矢印の意味は何か、私に浮かんでくる疑問を問いかけました。それに答える米井さんの様子からは、カテゴリーについて、米井さんなりに考えていることが分かってきましたので、そのまま、理論的メモノートに記載することをお勧めしました。やはり、書いて、書いて、書き続けることです。

このように、今回の研究発表は、【研究する人間】としての米井さんの成長を感じるものだったと思います。そして、この研究が実り多きものになることを祈っています。最後にはなりますが、活発にご発言をいただきました、フロアの皆さんにお礼申し上げます。

3. 研究の概要

1) 研究の背景

現在日本では高齢化や人口減少が進み、人びとの生活領域における支え合いの基盤が弱まっており、「支え手」「受け手」という関係を超越して地域をともに創っていく「地域共生社会」の実現が目指されていることから(厚生労働省, 2017)、障害を持つ者も地域を作っていく主体となり、「支え手」になりうる存在と考えることができる。近年、脊髄を損傷する者は年間推定 6 千人以上とされる(Miyakoshi et al., 2021)。脊髄損傷者の場合、運動と知覚の麻痺に加え、呼吸器・排泄・皮膚・自律神経障害等の様々な合併症を抱えるが、その生命予後は向上しており(古澤, 2017)、健康でより豊かな人生を送るための支援が重要になっている。しかし、高齢化の進展等に伴う疾病構造の変化等を踏まえた医療提供体制の整備が進み(厚生労働省, 2020)、入院期間の短縮や早期の在宅復帰が推奨されている。このため、脊髄損傷者は、地域における様々なサービスの連携が十分でない中、長期的な視点からの情報提供が十分に行われずに社会復帰に向けての課題を残したまま退院することになるとされるが、一方で医療機関がピアサポートを活用することで社会復帰に向けての課題解決の一助となる可能性も示唆されている(一柳ら, 2017)。

ピアサポートとは同じような共通項と対等性をもつ人同士(ピア)の支え合いを表す言葉であるとされ(種田, 2019)、障害領域においてのピアサポートについて岩崎は「障害のある人生に直面し、同じ立場や課題を経験してきたことを活かして仲間として支えること」と定義している(2017)。ピアサポートの形態は、自然発生的に互いを支え合うようなものもあれば、似たような経験をしている仲間を支えるために組織を作り、支援を提供するようなピア運営組織など、様々な形態があるとされ(宮本, 2019)、その障害特性に応じた特徴を持ち、社会的な背景を伴って発展してきたと考えられる。脊髄損傷者のピアサポート組織としては全国脊髄損傷者連合会があり、独自のピアマネージャー養成制度を導入して様々な工夫をしながらその活動を展開させている(全国脊髄損傷者連合会千葉県支部, 2022)。脊髄損傷者は、事故や病気によってある日突然不可逆的な重度の障害を負い、これまでに経験したことのないような絶望と不安を経験するとされることから、脊髄損傷者におけるピアサポートでは、合併症の管理、在宅生活や就労の心配、福祉や医療の相談など、脊髄損傷に特有の様々な問題に対応するとともに、他の誰よりも当事者の心の痛みをわかち合える存在とされる(全国脊髄損傷者連合会, 2022)。しかし、脊髄損傷者には他の疾患に比べて人数が少なく出会いづらいという特性があり、入院中はピアサポートの時間が確保しにくいこと、ピアサポートを積極的に受け入れてくれる医療施設が少ないこと(全国脊髄損傷者連合会千葉県支部, 2022)、短い入院期間に出会える当事者の人数は少なく、不安を抱えたまま在宅生活を始めるケースは少なくないこと(島本, 2016)等の課題も示されている。

先行研究からは、脊髄損傷者において同種の障害者との関係性は自分の抱える不安や問題の解決に直接寄与した「モデル」になったことが明らかにされており(後藤ら, 2013; 田垣, 2006)、その関係性から得られたものは専門職との関係では得られにくいものであると示唆されている(田垣, 2006; 南雲,

1997)。しかし、入院治療終了後の脊髄損傷者の生活やピアサポートとの関わりとその影響については十分に検討されていないと考えられる。

これらより、地域で生活する脊髄損傷者とピアサポートとの関わりや影響を明らかにすることは、脊髄損傷者が健康でより豊かな人生を送るための支援を考える上で重要な課題と考えられる。

2) 研究の目的

地域で生活する脊髄損傷者を対象として「脊髄損傷者が地域生活を送る上で、ピアサポートとどのような関わりを持ち、どのような影響を受けてきたのか」そのプロセスについてインタビューを行うことにより、「脊髄損傷者が地域で生活していくプロセス」を明らかにし、「脊髄損傷者がピアにつながるためには何が必要なのか」「脊髄損傷者におけるピアは地域で生活する脊髄損傷者にどのような影響を与えているのか」について質的に検討することを目的とした。

3) M-GTA に適した研究であるか

本研究が M-GTA による分析が最適であると考え理由は、①本研究は脊髄損傷者と関わる人々との社会的相互作用を捉えようとするものであること、②本研究は「脊髄損傷者が地域で生活していくプロセス」についての理論を生成し、実践的応用を目指すものであること、③本研究で明らかにしようとする理論がプロセス的性格をもつものであることの3点である。

4) 分析テーマへの絞り込み

研究開始当初は、ピアサポートとの関わりを中心とした『脊髄損傷者が地域での生活を確立・維持していくプロセス』としていたが、その後、修正を繰り返し、SV 後は『脊髄損傷者が地域で生活していくプロセス』として発表会に臨んだ。

表 1 研究対象者の属性及び特性

(N=13)

ID	性別	麻痺の状態	受傷原因	受傷年齢	現在の年齢	受傷経過年数	職業	活動	時間	方法
A	男性	四肢麻痺	交通事故	10代後半	50代前半	35~39	有	有	0:55:46	対面
B	男性	四肢麻痺	落下事故	20代前半	50代前半	30~34	無	無	1:09:36	対面
C	女性	対麻痺	物体に当たる	10代後半	50代後半	40~44	有	有		対面
D	男性	対麻痺	交通事故	20代前半	50代前半	25~29	無	無	1:52:38	対面
E	男性	対麻痺	交通事故	40代後半	70代前半	30~35	無	有	0:53:03	LINE
F	男性	四肢麻痺	落下事故	20代前半	50代前半	25~29	有	有	1:14:38	Zoom
G	女性	対麻痺	物体に当たる	20代後半	30代前半	5~9	有	有	1:02:01	対面
H	男性	四肢麻痺	落下事故	10代後半	40代後半	25~29	有	有	1:29:44	対面
I	女性	対麻痺	スポーツ事故	20代前半	40代後半	20~24	有	有	1:04:13	Zoom
J	男性	四肢麻痺	交通事故	10代後半	30代前半	10~14	有	有	1:06:23	Zoom
K	男性	四肢麻痺	落下事故	10代後半	40代前半	20~24	有	有	1:16:40	Zoom
L	男性	対麻痺	手術の後遺症	10代前半	40代前半	25~29	有	有	1:11:00	Zoom
M	男性	対麻痺	物体に当たる	20代前半	30代前半	5~9	有	有	1:06:51	Zoom

5) 分析焦点者の設定

『地域で生活する脊髄損傷者』とした。

6) 結果の概要

(1) データの収集方法と範囲

2022年12月~2023年6月の間に、同意を得た研究対象者に随時日程調整の上、インタビューガイドに基づいた半構造化面接を1人に1回実施した。インタビュー内容は、基本的な背景(年代、生活状況、受傷や障害の状況と経過、所属や活動の状況等)、地域での生活を確立していく過程、ピアサポートとの関わりや影響とその考えであった。面接実施者は13名、面接時間は一人当たり平均1時間6分21秒であった。研究対象者は脊髄損傷であり、過去、または現在、地域での生活を確立・維持していく上でピアサポートに関わった経験を持つ人で18歳以上の方とした。研究対象者の選定は、全国脊髄損傷者連合会α支部に依頼して調査への参加を呼びかけると共に、併せて機縁法により紹介を受けた。本研究は放送大学研究倫理委員会審査の承認を受けた(通知番号2022-45、2022年11月19日承認)。

(2) インタラクティブ性と現象特性

研究者は保健師・当事者の家族であり、直接的な治療者とは違う視点を持ち理解する立場にあると考えた。データ提供者らには質問に応じて研究者の背景を説明した。データ提供者らは快く協力を申し出

てくれた。分析結果の応用者は、脊髄損傷者の医療や福祉に関わる人、家族、友人、職場の人、当事者等と考えた。現象特性は「(生活していくためには)わからないなりに向き合い、試行錯誤しながら、形を変えていく」と考えた。

(3) 現段階での結果図・ストーリーライン・概念生成とカテゴリーの検討(投影資料により説明)

概念 3「ピア刺激による奮起」とカテゴリー【生活スキルの体得】を選択し、説明した。

7) SVを受けての変更点

SVを通して、研究の問いが複数あり分析テーマの絞り込みができていなかったこと、概念が分析テーマのプロセスを構成するものになっているかという分析が不十分だったことに気が付いた。分析テーマについてプロセスの始点と終点、どのようなプロセスになりそうか、実践的応用、課題や疑問の整理、インタビューガイドの見直し等の作業を通して分析テーマの絞り込みを行った。

8) 分析を振り返って

分析テーマの絞り込みがとても重要であると理解できた。テーマを絞り込み、分析手順を確認できたことにより、概念生成の段階でのより深い分析から概念間の関係も見えるようになり、カテゴリー生成につながる事が理解できた。

9) 主な引用文献

古澤一成(2017):脊髄損傷慢性期リハビリテーションのマネージメント:回復期から維持期リハ医療で知っておきたいこと, Monthly book medical rehabilitation, 209, 21-29.

後藤純子, 中村恵一, 江口雅之, 他(2013):ピアサポート活動を行う脊髄損傷者当事者の意見:「社会生活講座」の講師アンケートより, 総合リハビリテーション, 41(8), 767-773.

一柳純子, 田中宏太佳, 中村恵一, 他(2017):脊髄損傷者の社会参加, Monthly book medical rehabilitation, 209, 64-74.

岩崎香, 秋山剛, 山口創生, 他 (2017):障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修の構築, 日本精神科病院協会雑誌=Journal of Japanese Association of Psychiatric Hospitals, 36(10), 990-995.

木下康仁(2020):定本 M-GTA 実践の理論化を目指す質的研究方法論, 株式会社医学書院, 東京.

厚生労働省(2017):「地域共生社会」の実現に向けて(当面の改革工程), https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000150632.pdf(検索日 2022.7.28 検索)

厚生労働省(2020):令和2年1月29日 第73回社会保障審議会医療部会 資料1-1 医療機能の分化・連携の経緯と外来機能の明確化・かかりつけ医機能の強化に向けた検討の進め方について, <https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/000589754.pdf> (検索日 2022.7.28)

宮本有紀(2019):ピアサポートをめぐる海外の状況, 岩崎香編著, 障害ピアサポート—多様な障害領域の歴史と今後の展望, 18-19, 中央法規出版, 東京.

南雲直二(1997):ピアサポートシステム, 南雲直二, 脊髄損傷における心的外傷の諸相と援助に関する研究, 東北大学, 博士論文, 87, 332-343. doi:10.11501/3150203

島本義信 (2016):脊髄損傷者における早期からのピアカウンセリング, リハビリテーション・エンジニアリング, 31(2), 44. doi: 10.24691/resja.31.2.44

田垣正晋(2006):障害の意味の長期的変化と短期的変化の比較研究—脊髄損傷者のライフストーリーより—, 質的心理学研究, 5, 70-98.

種田綾乃(2019):ピアサポートとは何か, 岩崎香編著, 障害ピアサポート—多様な障害領域の歴史と今後の展望, 7-8, 中央法規出版, 東京.

全国脊髄損傷者連合会(2022):ピアサポートとは, <https://peer-s.net/about/>(検索日 2023.7.18)

全国脊髄損傷者連合会千葉県支部(2022):全脊連のピアサポート活動の取り組みについて, <https://www.normanet.ne.jp/~ww101938/img/pdf/piakatudou.pdf> (検索日 2022.7.28)

【成果発表】

佐々木 理恵(東京大学 医学系研究科 医学のダイバーシティ教育研究センター)

Rie Sasaki:The University of Tokyo Center for Diversity in Medical Education and Research

精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成するプロセス

The process of role generation for peer support workers working in the Mental health care and welfare.

1. 発表の過程を通しての感想や学び

この度は、大変貴重な機会を頂きまして誠にありがとうございました。この機会によって自身の分析を振り返る機会となりました。分析については 11-1_分析初期における振り返りにも記したような、M-GTA の初学者が行いがちな失敗を順調に重ねてしまいましたが、その失敗経験が比較的初期で良かったと感じています。お陰で分析の終盤に M-GTA の抑えるべきポイントを明確にしながら分析を進めることが出来たと感じています。とはいえ、はじめての M-GTA での分析は非常にエネルギーがいるものでした。特に生成した概念が、別に生成した概念とどのように繋がっているかを結果図含め、現象として現すことの難しさを、成果発表会の際にも改めて感じた次第です。調査対象者の方が提供下さった貴重なデータと真摯に向き合い、すでにある概念に当てはめる分類思考ではなく、まだ出会っていない現象を明らかにしていくために、今後も M-GTA 習得への継続した修練をしていきたいと思った次第です。今回、SV を担当下さった林葉子先生には心よりお礼申し上げます。特に林先生には当方の準備が直前まで出来ていなかったにも関わらず、クイックレスポンスをして下さったことや、暖かい励ましの言葉も添えて頂きました。改めてお礼申し上げます。

2. スーパーバイザーのコメント

林 葉子((株)JH 産業医科学研究所)

1) 発表全体へのコメント

佐々木理恵さんの『精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成していくプロセス』の修論発表会での発表で、とても貴重で、興味深い研究秀逸であった点は以下の3点である。

一つはM-GTAという分析方法を用いて論文を書いていく手順、分析方法で、彼女自身の分析体験から引き出された工夫や注意点を分かりやすく示している。これらの注意点は初学者にありがちなことであるので、初学者にとっては大変役立つ提案となっている。

次は分析がカテゴリー化まで進んでいたにも関わらず、「要約的な概念やカテゴリーをタイプ化している」と気づいた時点で、すべての分析を、最初からやりなおした。その際、理論的メモと理論的メモノート(実際にはパワーポイントファイル)を活用して、生成した一つの概念をめぐるプロセスをパワーポイントに図式化していき、小さなプロセスの流れをパワーポイントのなかに増やしていった。全体の飽和化の前に、分析ワークシートを充実させることが小さな飽和化の第1歩になったと考える。

もう1点は概念の数の変化と概念の統合、分離の変遷を、折れ線グラフや、修正した分析ワークシート

の変わり具合を示しながら可視化したこと。上記の工夫は、初学者には役に立つであろう。

2) 分析テーマへのコメント

研究テーマと分析テーマに使用する言葉をどのように選定していったかを、様々なエビデンスを示しながら決定していた。これらのことは、研究の根本的なところである。修士の早期のうちに、たくさんの先行研究を読み、自分の研究に役立つかどうかを評価していくと、徐々に、研究テーマも絞り込める。ひいては、研究テーマから分析テーマに絞り込んでいくこともできるようになっていくと考える。

3) 結果へのコメント

修士論文発表会なので、修士の方たちが M- GTA を使って分析し、論文を書いている手順と注意点を示してくださいと依頼したとおりの発表パワーポイントであったので、今回はしいて内容まではSVをしなかった。

分析結果については、会場からは、以下のようなご意見をいただいた。その要点を以下にまとめる。結果図が現実の行動や状況のプロセスで示されているところがあること、分析テーマに合致するように工夫したほうが良い概念があること、コア概念、この分析テーマならではの概念は何かなどが指摘された。結果図は利用したい人が実際に利用できるヒントとなるターニングポイントを示せることが M- GTA での分析の特徴と考える。ターニングポイントになりうる概念は、分析焦点者が経験した人や物(環境など)との相互作用に多くのヒントがある。佐々木さんも、分析ワークシートの理論的メモに、ヴァリエーションを定義のように解釈した理由を書き加え、小さいプロセスのポイントのなかにも、概念と概念をつなげようと思った理由、これらの概念群は分析テーマのどんな部分を現そうとしているのかを記していくと、つなげたときにターニングポイントを提示できているかを確認できるであろう。

4) 最後に

興味深く、貴重なデータなので、再度、最終分析に挑戦し、投稿を旨ざしてほしい。ここで、めげずに、引き続き分析を頑張って結果をだしていくことを期待している。

3. 研究の概要

1) 研究の背景

本研究に取り組む直接的な動機は、自らのピアサポートワーカーとしての実践に基づく問いである。2000年以降、精神保健医療福祉サービスは当事者主体であるべきという流れに加え世界的にもリカバリー志向サービスへの転換が大きな潮流となっている。アメリカでは2003年の大統領新自由委員会レポートにおいて「精神保健システムをリカバリーに向けて方向づける」¹⁾と示され、日本では2004年に厚生労働省による「精神保健医療福祉の改革ビジョン」において「入院医療中心から地域生活中心へ」とした。その中で「非常に有効なピアサポート等についての活用を図る」²⁾と示されたことによって、精神保健医療福祉サービスはリカバリー志向への転換を目指す動きが加速していく。アメリカでは2004年に、後に全米ピアスペシャリスト協会となる活動が開始され³⁾、ピアサポートワーカーへの関心が活発になった。我が国においても2014年に日本ピアスタッフ協会⁴⁾、2015年に一般社団法人日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構⁵⁾など、ピアサポートに従事するもの同士がつながり団体が設立された。2021年度には厚生労働省は障害報酬改定において、「一定の要件を設けた上で、加算により評価する。」と明記し、ピ

アサポート体制加算およびピアサポート実施加算として報酬化を開始した⁶⁾。このことから今後一層のピアサポートワーカーの活躍の場や、雇用機会の拡大も予想される。

2) 用語の定義

(1)ピアサポートの定義

本研究におけるピアサポートとは、「似たような困難の経験や状況を有するもの同士による支え合い」と定義する。

(2)ピアサポートワーカーの定義

本研究ではピアサポートワーカーを、「所属機関と雇用契約を結んだ上で、自らの精神的困難を有した経験や精神保健医療福祉サービスを利用した経験を開示し、活かすことで、サービスユーザーのリハビリや精神保健医療福祉サービスが、より良くなることを目的として働く職員」と定義する。

3) 施策の変遷および先行研究

近年、我が国の精神保健医療福祉サービスが当事者主体やリハビリ志向へと転換していくなかで、精神的困難の経験を有し、その経験を活かして働くことに大きな関心が寄せられている。日本における精神障害を有する当事者同士の活動はセルフヘルプグループとして1960年代前半に外来患者の集まりや病院内自治会から始まったとされる⁷⁾。2000年以降になると国の事業や制度との関わりが色濃くなり、2000年に厚生労働省においてピアサポート体制奨励金制度の創設がされた。同年、大阪府では全国に先駆けて精神障害者退院促進支援事業が開始され、当事者による自立支援員の活動が始まった。その後、2003年には国の施策として当該事業が全国に展開していった⁸⁾。2010年の地域移行・地域定着支援事業実施要綱の中では「ピアサポーターの育成に関する研修等」と明記され、この頃より研修体系を構築するための取り組みが進んでいった。2009年には厚生労働省の障害者保健福祉推進事業として「精神障害者のピアサポートを行う人材を育成し、当事者の雇用を図るための人材育成プログラム構築に関する研究」が実施された。当該事業の中で、「ピアサポートスペシャリスト」を組織的に導入していくことを検討する目的での研修が実施された⁹⁾。

その後、2016年には障害福祉サービス事業所、2021年には精神科医療機関を対象としたピアサポートワーカーの現状や活用に関する調査が実施された¹⁰⁾¹¹⁾。当該調査では彼らの採用時期の報告もされている。この2つの調査から、当事者主体の支援を目指し、施策と共にピアサポートワーカーの雇用が進んでいったことがわかる。2010年(平成22年度)になると精神障害者地域移行・地域定着支援事業の新規項目において「ピアサポーターの同行活動経費」が予算計上された。そして、厚生労働省科学研究により2015年(平成28年度)から3年間で作成されたピアサポーター養成研修プログラム¹²⁾を土台にし、2020年(令和2年度)の地域生活支援事業として「障害者ピアサポート研修事業」が位置づけられた¹³⁾。その後、厚生労働省は2021年度の障害報酬改定において、ピアサポートの専門性を評価し、ピアサポート体制加算およびピアサポート実施加算として報酬化するに至る¹⁴⁾。

先に述べた通り、ピアサポートワーカーの現状を調査したものとして、主に2つの調査報告書¹⁰⁾¹¹⁾がある。ピアサポートワーカーについての研究や実践報告等は2000年前後より各種事業や政策の発展と共に、様々な角度からされているが、現場における実践報告や各種学会誌等へ寄稿、対談記事等が多いのが現状である。ピアサポートワーカーについての研究や実践報告の内容を分類するとおおよそ次の9項目に分類できる。

①ピアサポートおよびピアサポートワーカーへの期待、②ピアサポートワーカーの役割、③ピアサポートワーカーの専門性および固有性、④ピアサポートワーカーの有効性および意義、⑤ピアサポートおよびピアサポートワーカーへの評価、⑥ピアサポートワーカーの育成体制、⑦ピアサポートワーカーの雇用、⑧ピアサポートワーカーへのサポート、⑨ピアサポートワーカーと既存の専門職との協働。

先行研究の概観から、精神保健医療福祉領域におけるピアサポートワーカーへの関心の高まりや期待があることや、彼らがその力を十分に発揮していくための十分な理解や環境づくりにおける懸念や課題が山積している現状が明らかとなっている。ピアサポートワーカーへの期待はサービスユーザーのリカバリーの実現¹⁵⁾というマイクロな側面に加え、伝統的な精神保健医療福祉サービスの変革に寄与するといったマクロな側面での期待がある。そしてその具体として、サービスユーザーのリカバリーの促進やニーズの汲み取り、権利擁護や意思決定支援等において役割を発揮することが求められていることが明らかにされていた。ピアサポートワーカーの有効性は、病の経験を有することに基づいており、サービスユーザーのみならず、共に働く専門職にも意義があることが明らかにされていた。ピアサポートワーカーがどのように役割を発揮していくかについては、病の経験を有する立場からの個人的経験の開示¹⁶⁾や話を聞く姿勢¹⁷⁾、相談・助言等¹⁸⁾がピアサポートワーカーの専門性であるとされていた。またピアサポートワーカーが学びを取得できる機会となる研修も徐々にではあるが整い始めてきている。しかし、研修体制や学習内容は発展途上であることが明らかとなった。ピアサポートワーカーの雇用やサポート体制については、必要性は言われているものの、今後の整備が期待される。以上のことから、ピアサポートワーカーの有効性や意義に関する研究は多い。しかし、実際に働くピアサポートワーカーにとって、役割を担うに際する専門性や研修体制、ピアサポート体制等が十分とは言えない。さらに、ピアサポートワーカー自身がどのようなプロセスを辿りながらこの役割を生み出しているのかについては明らかにされていない。

4) 研究の目的および社会的意義

本研究の目的は、精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成していくプロセスを明らかにすることである。

本研究の社会的意義は本研究の社会的意義は以下 3 点にまとめられる。第 1 にピアサポートワーカーが役割を生成するプロセスを明らかにすることで、ピアサポートワーカー自身にとって、いまどのような状況に置かれているのかを認識することができる。それにより、働くなかで起こり得る困難の想定が立ちやすくなり、働きに対する不安を軽減できる可能性がある。さらに、困難に対する方策の可能性が高まると考える。第 2 にピアサポートワーカーを雇用する組織や、上司、同僚にとっても、ピアサポートワーカーが働くなかで感じる困難への認識が高まる。それにより、支えどころや業務内容および業務量の調整、合理的配慮等への視点に活かすことができると考える。第 3 にピアサポートワーカーを間接的に支える機能を有する、研修会や学習会等での学習内容に活かすことができると考える。

5) M-GTA に適した研究であるか

M-GTA は、データに密着した分析から理論を作り出す分析方法であり「社会的相互作用に基づく人間行動を説明し予測することに優れたプロセス性のある理論を生成するための質的研究方法である」さらに分析結果によって示された理論は「実践的活用を促す理論」であることから実践への応用可能性がある。なお木下は、M-GTA がどのような研究に適しているかについて以下の 3 点を挙げている。①社会的

相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れた理論であること、②ヒューマンサービス領域が適していること、③研究対象とする現象がプロセス的性格を持っていること¹⁹⁾である。

よって本研究では、精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成していくという現象にプロセス的性格を持っていること、社会的相互作用があること、ヒューマンサービス領域の研究であること、そして分析結果によって示された理論を実践現場へ還元することを目指していることから M-GTA を用いて分析を行うことが適切であると判断した。

6) 分析焦点者の設定

精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカー

7) 分析テーマへの絞り込み

当初は、「精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を獲得するプロセス」と暫定的に分析テーマを設定し、分析作業を進めていた。しかし、収集したデータの読み込みや、分析作業を進めるなかで、役割を生み出している営みであることが見えてきた。分析作業が収束化に入った段階で、分析テーマを再考し、最終的な分析テーマは、「精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成するプロセス」とした。

8) データ収集方法と範囲

データ収集の範囲については、「精神保健医療福祉領域において、所属機関との雇用契約に基づく形で働き、雇用開始から約 3 年を経過し、週 20 時間以上程度勤務するピアサポートワーカー」を対象とした。理由は以下 2 点による。

① 雇用開始から約 3 年を経過しているとした根拠

2018 年度(平成 30 年度)の障害者雇用実態調査結果(厚生労働省)によると精神障害者の平均勤続年数は 3 年 2 カ月と推計されている²⁰⁾。このことから、ピアサポートワーカーとして役割を生成していくプロセスにおいて、平均勤続年数が約 3 年以下の場合、ピアサポートワーカーとしての役割の生成に至る以前の退職の可能性があると考え、本研究では、勤務開始より約 3 年を経過している方を対象とした。

② 週 20 時間以上程度勤務するとした根拠

障害者雇用促進法の障害者雇用率において精神障害者は 20 時間以上が雇用率のカウント対象となることを根拠とした²¹⁾。ただし、所属機関との合理的配慮等に基づく形による相談などによって勤務時間の調整を行う機会が生じることを考慮し、雇用開始から現在における期間の中で週 20 時間以上程度に相当する期間があった方を対象とした。

データ収集は半構造化面接により行った。調査協力者の選定に際しては、スノーボール法による選出が可能と考え、筆者がコンタクト可能である精神保健医療福祉領域におけるピアサポート関連の研修会や学習会、フォーラム等で出会ったピアサポートワーカーの方に協力を得ることとし、実際にインタビュー調査への同意が得られた 6 名にインタビュー調査を実施した。(表 1)。

調査協力者には、事前にインタビューガイドを送付し、事前にインタビュー調査にて何う内容の提示を行った。インタビュー調査は、ご自身の所属先の基本情報、入職から現在に働きに至るまでの時間軸をもとにし、同僚、当事者仲間、主治医、家族、職場外のピアサポートワーカー仲間等との相互作用や、各時間軸におけるその時々々の困難に感じたことや変化などをお伺いできるように作成した。(インタビューガイ

ドは、当日提示資料に記載)。なお、インタビュー調査の期間は2022年4月～6月である。

(表1) 調査協力者の概要

対象者	年代	ピアサポートワーカーとしての経験年数	現在の勤務先	診断名
Aさん	40代	6年5カ月	障害福祉サービス事業所	統合失調症
Bさん	40代	16年0カ月	障害福祉サービス事業所	双極性障害
Cさん	30代	11年1カ月	障害福祉サービス事業所	統合失調症
Dさん	40代	6年1カ月	障害福祉サービス事業所	統合失調症 広汎性発達障害
Eさん	50代	3年8カ月	精神科医療機関	うつ病
Fさん	40代	8年1カ月	精神科医療機関	うつ病

9) 倫理的配慮

本研究は、大正大学倫理審査委員会の承認を受け実施した(大正大学研究倫理委員会承認番号第21-33号)。

10) 結果(以下は当日提示および回収資料とする)

生成した概念やカテゴリーの一覧、分析ワークシート、結果図、ストーリーライン

11) 分析を振り返って

(1) 分析初期

分析初期における困難として主に次に記す3つの困難があった。①インタビューデータの上から順に分析(概念生成)をはじめてしまった。②バリエーション(具体例)の選択がピンポイント(短文)過ぎてしまった。③概念生成がただの分類になっていた。この3つとも、どれもM-GTA初学者であれば一度は行う失敗と聞く。困難への工夫としてインタビューデータをとにかく何度も読み込み、コアとなりそうな概念を探し、そこから次につながる概念を探すようにした。なお、その際に一度分析したデータに対し「せっかく作業したの…」という未練が残ると後が厄介だと思い、潔くデータを全て削除し、最初から分析をやり直した。結果的にこのことがその後の分析をスムーズにさせたと思う。これらのことを踏まえ、当初Aさんから分析を開始したが、ディテールが豊富なBさんから分析を開始した。

(2) オープン化における困難と工夫

オープン化においてもM-GTAの所学者が陥る困難を順調に経験した。困難は主に次に記す3つであった。①概念名多すぎ(作りすぎ)。②データとの距離が近すぎ。③動きを捉えた概念の命名困難。②においては分析者である筆者自身が、分析対象者と同じ立場である為、データに入り込み過ぎてしまう所からくる困難であった。気を付けないと「その人にとっての意味や経験の解釈」に筆者自身の考えが入り込む余地が生まれそうになったため、思考が飽和し過ぎていると感じた際には別のデータを読むなどの切り替えをしながら分析を進めた。また③の概念名については出来る限り動きを現す動名詞で端的に表現するように心掛けると共に、他の研究の概念名を参考にすることや、類義語や英語表現等を紐解きながらフィットする言葉を探していった。

(3) 分析ワークシートの工夫

分析ワークシートを作成する際の工夫は主に次に記す8点である。①分析ワークシートのヘッダーに分析テーマを入れる。その意図は分析テーマを常に意識し、テーマから外れた分析とならないようにするためである。②前後の文脈を含めて、大きなかたまりとしてバリエーション(具体例)を選択する。(但しこの辺りは指導者によって方向性の違いがあることをSVや成果発表会で感じた)③選択したバリエーションの後ろにはデータの場所を記載するようにした(A:○○○-○○○)=(誰:抜き出した行数)。④理論的メモには記載した日付けを必ず記入する。⑤概念名を変更した際には、古い概念名が何だったか分かる様に記しておく。⑥理論的メモは相互作用の対象を記入した。⑦理論的メモには他の概念との統廃合の記録も残す。⑧概念生成はWordを使用し、作業更新毎にファイルを作成した。その意図は過去のデータを見返せるようにするためである。

(4) 分析テーマの修正

調査協力者全員分(6名)の分析が、一旦終わった段階で再度分析テーマの見直し、修正を行った。木下先生のご著書にも調査計画の段階から分析テーマの検討は始まっているが、データ分析に入る際に再度検討し意識化のギアをあげる。そして研究テーマから全体としてのフィット感、マッチング感を確かめて絞っていくとある(木下, 定本M-GTA, 2020, P72-83)。本研究の分析当初は「精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を獲得するプロセス」としていたものの、6名分の分析が一旦終わり、収束化に向かう段階で、改めて役割理論についての先行研究の整理を行い、最終的な分析テーマを絞っていった。

(5) 収束化における困難と工夫

収束化における困難は主に次に記す2点であった。①理論的飽和化の難しさ。②修論提出日という限りある時間のなかでの作業。①についての工夫として結果図作成と平行して作業することで、概念間の関係やプロセス全体としての大きなまとまりを意識しながら進められたように思う。②に対しては、結果的に提出の2,3日前まで概念名の検討や結果図の修正を行った。

(6) 結果図の作成における困難と工夫

結果図作成における困難として主に次に記す5つの困難があった。①当初、概念同士の繋がりが上手く掴めなかった。②全体の動きを捉えた図示の難しさ。③A4_1枚(論文に入れる形として)におさめる図示の難しさ。④作図ツールの試行錯誤。⑤作図の道のりが長く途中で力尽きた。①については11-01にも記したが、分析初期における初学者が行いがちな失敗が要因であった。分析4人目くらいから少しずつコツを得たように思うが、慣れるまではインタビューデータをとにかく何度も読み込み、中心となる概念をまず探すことに尽きると思う。またはじめは結果図という体を取らずとも、概念同士の関係図を作りながら(結果図の元になるようなもの)進めるようにした。③については、はじめは思うままに作図する形で良いと思うが、ある程度の段階で論文化した際の収まりの形を意識する必要がある。工夫とは言えないが、これについては何度も書き直しをするのみと思い、結果的に4,50枚作成した。なお、作図については木下先生のご著書によると最初は手書きでとある。作図ツールも試行錯誤をし、はじめは手書き、その次に付箋に書き模造紙にはる、マグネットシートを活用するなど紆余曲折したが、最終的にはパワーポイントを使っての作図に落ち着いた。なお、分析ワークシートの理論的メモ同様、作図の際にも必ず日付けを記載するようにした。また結果図がある程度まとまったと判断した段階で、M-GTAを使用して分析を行った大学院の先輩や、研究協力者にも見て頂き、フィットしているか、違和感がないかなどのフィードバックを頂いた。

(7) ストリートラインにおける困難と工夫

ストリートライン作成における困難として、文章が長くなりがちという困難さを感じた。これについては木下先生のご著書を確認し、「A4 半頁以下、800 字ほど」(木下, 定本M-GTA, 2020, P196)を頼りにし、作成した。作成の際には、結果図や概念名、カテゴリー名の再考を何度も往復しながら分析テーマのプロセスを説明できているかを確認し、第三者にもチェックして頂いた。

12) 現象特性の検討

分析当初は、精神障害を持ちながら働くという土台部分と、精神障害を活かして働くという役割の生成部分が「自転車のチェーン」のような現象であるという現象特性を検討していた。しかし、修論提出の時間的限界もあり、最終的にうまく捉えることが出来ずに終わった。今回、林先生からの SV の中で「ペダルを踏むことでチェーンを繰りかえし動かし、前に進む」という現象特性のご助言を頂き、捉えきれずにいた現象特性へのヒントを頂いた。

13) 研究の流れ

・指導教授による研究指導の回数と時期

M1 秋ごろまでは隔週 1 回程度、倫理審査が見えてきた冬以降は週 1 回程度であった。

なお修論提出間際は週 1 回以上の頻回なご指導を頂いた。

・研究計画書提出・発表の義務の有無

M1 の講義内にて研究計画を作成。その後、学内の中間発表等で発表および提出。年度末には研究経過報告書を提出した。

・ゼミ発表や中間発表の回数と時期

年に 2 回、学内において研究経過報告会(中間発表)が実施された。ゼミ発表はそれら報告会の前に開催され発表をした。

・研究会や勉強会での発表の回数と時期

なし

・外部指導教員の活用の有無

なし

・執筆開始の時期

執筆開始…2022 年 9 月下旬～(先行研究等書ける所から執筆を進めた)

修論提出…2022 年 12 月 15 日

修論審査会…2023 年 01 月 25 日

修正のち正製本提出…2023 年 02 月 28 日

14) 主な引用文献

- 1) SAMHSA(2003)『President's New Freedom Commission on Mental Health : Achieving the promise.』
<https://govinfo.Library.unt.edu/mentalhealthcommission/reports/FinalReport/downloads/downloads.html> 2022 年 9 月 20 日アクセス
- 2) 厚生労働省(2004)『精神保健医療福祉の改革ビジョン(概要)』
<https://www.mhlw.go.jp/topics/2004/09/dl/tp0902-1a.pdf> 2022 年 3 月 1 日アクセス
- 3) National Association of Peer Supporters(2022)『The History of N.A.P.S.』
<https://www.peersupportworks.org/about/our-mission-vision-and-history/> 2022 年 9 月 1 日アクセス

- 4) 日本ピアスタッフ協会(2022)WEB サイト <https://peersociety.jimdofree.com/> 2022年3月1日アクセス
- 5) 一般社団法人 日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構(2022)「日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構について」 <https://psr.jimdo.com/> 2022年3月1日アクセス
- 6) 厚生労働省(2021)「令和3年度障害福祉サービス等報酬改定の概要」
<https://www.mhlw.go.jp/content/000759622.pdf> 2022年3月1日アクセス
- 7) 坂本智代枝(2007)「精神障害者のピアサポートにおける実践課題—日本と欧米の文献検討を通して—」『高知女子大学紀要』社会福祉学部編, 第57巻, 67-79頁.
- 8) 坂本智代枝(2007)「精神障害者のピアサポートの有効性の検討—退院促進支援事業における当事者支援員のグループインタビューを通して—」『大正大学研究紀要』通号92, 314-301頁.
- 9) 特定非営利活動法人十勝障害者サポートネット(2010)『精神障害者のピアサポートを行う人材を育成し, 当事者の雇用を図るための人材育成プログラム構築に関する研究 障害者保健福祉推進事業補助金事業(障害者自立支援調査権給付プロジェクト)平成21年度報告書』
https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/cyousajigyou/jiritsushien_project/seika/research_09/01-18.html 2022年3月1日アクセス
- 10) みずほ情報総研株式会社(2016)「障害福祉サービス事業所等におけるピアサポート活動状況調査」
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000130380.pdf> 2022年3月1日アクセス
- 11) 株式会社浜銀総合研究所(2022)「精神科医療機関におけるピアサポートの現状と活用に関する調査 調査結果報告書」https://www.yokohama-ri.co.jp/shogai_bunya2021/pdf/hokoku.pdf 2022年3月1日アクセス
- 12) 岩崎香(2019)「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究 平成30年度厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)(総括)研究報告書」https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/2018/182091/201817003A_upload/201817003A0003.pdf 2022年3月1日アクセス
- 13) 岩崎香(2021)「ピアサポーターと専門職の協働」『精神科』科学評論社, 第39巻第4号(通巻232号), 467-472頁.
- 14) 厚生労働省(2021)「令和3年度障害福祉サービス等報酬改定の概要」
<https://www.mhlw.go.jp/content/000759622.pdf> 2022年3月1日アクセス
- 15) 大島 巖(2013)「「ピアサポート」というチャレンジ—その有効性と課題—」『精神科臨床サービス』星和書店, 第13巻1号(通巻第49号), 6-10頁.
- 16) 相川章子(2012)「プロシューマーと専門職との協働—日米のインタビュー調査から—」『精神療法』金剛出版, 第38巻, 第4号, 89-99頁.
- 17) 行實志都子、八重田淳(2019)「精神障害当事者団体のピアサポート活動における職業的妥当性について—フォーカスグループインタビューからの検討—」『駒澤社会学研究 文学部社会学科研究報告』駒澤大学文学部社会学科, 53号, 1-16頁.
- 18) 厚生労働省(2021)「令和3年度障害福祉サービス等報酬改定の概要」
<https://www.mhlw.go.jp/content/000759622.pdf> 2022年3月1日アクセス
- 19) 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂
- 20) 厚生労働省職業安定局(2018)「平成30年度障害者雇用実態調査結果」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11601000/000521376.pdf> 2022年3月1日アクセス
- 21) 厚生労働省都道府県労働局・ハローワーク(2022)「障害者雇用のご案内 ～共に働くを当たり前～」
<https://www.mhlw.go.jp/content/000767582.pdf> 2022年9月1日アクセス

【参加者の感想】

- ①お二人とも貴重なご発表をさせていただきまして、感謝申し上げます。研究に関する背景・動機・テーマ設定から分析過程も含めて、私も同じような事に悩み苦しんだため、非常に共感できました。忌憚のない開示に頭が下がる思いです。ありがとうございます。私自身も修士の時にフロアの皆様から沢山質問を受けまして、自分の考えが整理された覚えもあります。また、修士論文作成後も学術誌投稿に向けてM-GTAの研究会にでることで、沢山ヒントを頂きました。このため、皆様の思考の整理やヒントになる質

問を考えながら、恩返しのため研究会に参加しております。M-GTA研究会の発表の時に沢山質問された経験は私にもありまして、頭が真っ白になり、その時は辛いと思う事もありました。しかし、少し時間が経つと、その時にいただいた「問い」が研究への探究心や意欲の喚起につながり、学術誌の投稿や採択に到達した経験もあります。是非とも、M-GTA の奥深さや、次の研究への喚起になりますと幸いです。

②ハイブリッドでの開催準備ならびに運営していただきありがとうございました。一部、質問内容が質問者が関心を寄せた箇所に偏っているように感じました。聞いていて、いたたまれなくなりました。エキスパートの先生方からみると、当たり前の意見交換なのかもしれませんが、発表してくださっている方々が前向きな感想を述べてくださっていたので、救われた思いがいたしました。

③他の修士の方がどのように分析を進めたりしているのかを具体的に聞くことができ、参考になりました。分析をやり直したり、結果図を試行錯誤する過程など、自分のやり方がいいのかどうか全くイメージがつかなかったもので、聞くことができ有り難かったです。

④最後のグループディスカッションで各自が取り組む研究の疑問点を相談できる機会になっていたことが良いと思いました。

◇近況報告

(1) タイトル (2) 氏名 (3) 所属 (4) 研究領域 (5) 研究に関するキーワード (6) 内容

(1) 修士論文、経過報告

(2) 伊藤愛子

(3) 四日市看護医療大学

(4) 成人・老年看護学

(5) 認知症・看護・芸術

(6) 修士論文をM-GTAにて分析するため、方法をより深く学びたいと思い入会いたしました。8月中には一旦まとめて、考察に入りたいと思っております。現在は、弘文堂にて出版された木下先生の著書を熟読し、分析を進めております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

◇次回のお知らせ

第99回定例研究会

日時：2023年10月14日(土)13:00～

会場：大正大学

開催方法：対面とZoomのハイブリッド

◇編集後記

2023年5月、新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類相当に移行しました。これにより、少しずつ人々の生活はコロナ禍前の生活に戻りつつあります。M-GTA研究会においても、今回の修士論文発表会は数年ぶりの対面とオンラインのハイブリッド開催となりました。そのせいか、発表会では活発な意見交換がなされたように思います。

また、News Letterも本号より構成を一新しました。研究会報告では、「1. 発表を終えた感想や学び」「2. スーパーバイザーのコメント」を3. 研究概要より先に配置し、研究会に参加していただいた会員のみなさまに新たな情報がすぐに確認できる配置にしました。発表を終えて発表者が改めて学んだこと、スーパーバイザーからの研究に対する意義やさらなるアドバイス等々、研究会におけるディスカッションを経て、会員のみなさまに届けられたメッセージをご一読ください。研究会にご参加できなかったみなさまは、まず先に「3. 研究の概要」をお読みいただいたうえで、「1. 発表を終えた感想や学び」「2. スーパーバイザーのコメント」の順にお読みいただくと、理解しやすいと思います。その他、研究会に参加された方々の感想を新たに掲載することになりました。研究会での雰囲気伝わればと思います。これまでどおり、近況報告も募集しています。みなさまからの投稿をお待ちしています。

今後も会員のみなさまがNLを活用し、M-GTAに関する理解が深まるよう、NL委員会委員は努力する所存です。NLをぜひご活用ください。(唐田順子)

世話人：阿部正子、今井朋子、小沼聖治、唐田順子、菊地真実、岸田泰則、坂本智代枝、佐川佳南枝、隅谷理子、竹下 浩、丹野ひろみ、都丸けい子、長山 豊、根本愛子、畑中大路、林 葉子、平塚 克洋、McDonald, Darren (五十音順)

相談役：小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾 (五十音順)

編集・発行：M-GTA研究会

研究会のホームページ： <https://m-gta.jp>

問合せ先：研究会事務局アドレス office@m-gta.jp